

## 公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	ひなたぼっこハウス		
○保護者評価実施期間	令和7年11月19日 ~		令和7年12月19日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19	(回答者数) 15
○従業者評価実施期間	令和7年11月19日 ~		令和7年12月22日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	29	(回答者数) 24
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年12月25日		

## ○分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	当事業所は、定員5名の少人数制を採用した重症心身障がい児特化型の放課後等ディサービスとして運営しており、一人ひとりの心身状況や医療的ニーズに応じた、きめ細やかな支援を行っている。所沢市内においても数少ない、医療的ケア児の受け入れが可能な事業所であり、特に呼吸器を使用する医療的ケア児についても対応できる体制を整えている。 また、看護師を複数名配置することで、医療的ケアを必要とする子どもに对しても安全性に十分配慮した支援・見守りが可能となっており、安心して利用いただける環境づくりに努めている。	少人数制の特性を活かし、こども一人ひとりの医療的ケア内容や体調変化を日々細かく共有する体制を整えている。看護師を中心に、支援開始前の情報確認や支援中の観察を徹底するとともに、職種間での情報共有を密に行うこと、安全性を最優先とした支援を実施している。 また、医療的ケアの必要度や状態に応じて活動内容や関わり方を柔軟に調整し、無理のない形で安心して過ごせる環境づくりを意識的に行っている。	今後は、所沢市に2事業所に拡大したことより、医療的ケア児や重症心身障がい児の受け入れ体制をより安定的なものとするため、看護師や保育士を含む職員の専門性向上を目的とした研修や事例検討の機会を継続的に確保していく。 あわせて、呼吸器使用児等の安全管理に関するマニュアルの見直しや訓練を定期的に行い、緊急時対応力のさらなる向上を図る。 また、家族との情報共有を一層丁寧に行い、医療・生活両面から安心して利用できる支援体制の充実に努めていく。
2	当事業所では、ハイエース5台および福祉車両仕様のタント1台、計6台の送迎車両を自社で確保し、車いすをご利用のお子様を含め、すべてのご利用者様に対して完全送迎を実施している。特に重症心身障がい児や医療的ケア児の受け入れを前提とした送迎体制を構築しており、複数の車両を柔軟に運用することで、個々の医療的ニーズや身体状況に応じた安全で安定した送迎を可能としている点は、他事業所にはない大きな強みである。また医療的配慮が必要な児童の送迎を日常的に実施できる体制を有することは、地域内においても限られており、保護者が安心して通所を継続できる基盤となっている。	送迎にあたっては、重症心身障がい児・医療的ケア児の特性を十分に踏まえ、必ず看護師や保育士等の専門職が同乗できる体制を整えている。また、送迎車両ごとに児童の身体状況や医療的留意点を事前に共有し、移動中も体調変化や安全面に細やかに配慮できるよう努めている。さらに、複数台の車両を活用することで、無理のない運行計画を立て、個々の児童に応じた安全で安定した送迎が継続できるよう意識的に取り組んでいる。	今後は、引き続き複数台の送迎車両と専門職による同乗体制を維持するとともに、送迎時の安全性と支援の質をさらに高めるため、職員間での情報共有や連携を一層強化していく。具体的には、児童の体調変化や医療的ケアに関する留意点を、送迎前後も含めて確実に引き継ぐ仕組みを整え、送迎中の小さな変化にも迅速に対応できる体制づくりに取り組む。 また、災害時や緊急時を想定した送迎対応についても定期的に見直しを行い、どの職員が対応しても同様の安全確保ができるよう、研修やマニュアルの充実を図る。今後も、保護者が安心して預けられる送迎体制の維持・向上を目指し、継続的な改善に努めていく。
3	職員数を十分に確保し、マンツーマンに近い手厚い職員配置を行うことで、こども一人ひとりの体調や発達段階、障害特性に応じたきめ細やかな療育支援を実施しています。 また、保育士、作業療法士、看護師、児童指導員など多職種が在籍し、経験豊富な職員が連携することで、重症心身障がい児や医療的ケア児に対しても、安全性と専門性を両立した支援体制を構築しています。	多職種が関わる支援においては、日々の支援記録や申し送りを通じて、こどもの体調変化や支援内容を職員間で丁寧に共有し、支援の一貫性が保てるよう努めています。 また、専門職それぞれの視点を活かしながら支援計画を作成し、療育活動や日常生活支援に反映することで、こども一人ひとりに応じた個別性の高い支援を実践しています。 さらに、医療的ケア児については看護師を中心に安全管理や健康観察を徹底し、常にこどもの状態を最優先に考えた支援体制を維持しています。	今後は、職員間の連携をより一層強化するため、ケース検討や研修の機会を定期的に設け、多職種による支援の質の向上を図っていきます。 また、専門職の知見をより体系的に支援へ反映できるよう、支援方法の整理やマニュアル化を進めるとともに、こどもや保護者にとって、より安心感のある継続的な支援体制の充実を目指していきます。
1	当事業所では、重症心身障がい児および医療的ケア児の安全確保を最優先に、少人数制による専門性の高い支援体制を整えている一方で、総合支援学校以外の地域の学校や、地域社会との交流を含めた社会参加の機会が十分とは言えない状況があります。 特に、地域の小中学校に通う児童や、地域行事・交流活動への参加については、医療的ケアへの配慮や個別対応の必要性から実施の機会が限られており、結果として地域とのつながりを実感できる体験や、幅広い人との関わりを持つ機会が少なくなっていることが課題と考えています。	地域の学校や地域社会との交流機会が限定的となっている背景には、重症心身障がい児および医療的ケア児を主に受け入れているという特性があります。呼吸器の使用や医療的ケアを必要とするこどもが多く在籍しているため、外出時や集団活動においては、医療安全や健康管理に対する十分な配慮と人員体制の確保が不可欠となっています。 また、地域行事や学校交流は、多人数・不特定多数が参加する場面が多く、感染症対策や突発的な体調変化への対応が難しいことから、参加可否の判断が慎重にならざるを得ない状況があります。加えて、受け入れ先となる地域側においても、医療的ケアや重度障がいへの理解や対応体制が十分に整っていない場合があり、相互の調整に時間や労力を要することも要因の一つとなっています。 こうした事情から、こども一人ひとりの安全を最優先に考えた結果、地域参加や交流の機会が限定的となっている現状があると捉えています。	今後は、重症心身障がい児および医療的ケア児の安全確保を最優先としながらも、地域とのつながりや社会参加の機会を段階的に広げていくための取組が必要であると考えています。具体的には、地域の学校や関係機関と事前に十分な情報共有や役割分担を行い、医療的ケアや個別配慮が必要なこどもでも安心して参加できる交流の形を検討していきます。 また、事業所内で完結する活動に限らず、少人数・短時間から参加可能な地域行事や、事業所に地域の方を招く形での交流など、こども一人ひとりの状態に応じた無理のない交流機会の創出にも取り組んでいきます。加えて、職員の同行体制や看護師の配置を工夫し、外出や交流時においても十分な安全管理が行える体制づくりを進めています。 こうした取組を通じて、地域との相互理解を深め、こどもたちが地域の一員として安心して関われる環境づくりを、段階的かつ継続的に進めていきたいと考えています。

2	<p>職員数が多く、マンツーマンに近い手厚い支援体制を整えている一方で、職員配置や専門職間の連携・情報共有において、支援の質を一定に保つための調整や統一が常に求められる状況にあります。</p> <p>また、保育士、作業療法士、看護師、児童指導員など多職種が在籍しているため、それぞれの専門性をより効果的に活かすための役割整理や共通理解の深化が課題となっています。</p>	<p>当事業所における課題の要因として、重症心身障がい児・医療的ケア児を対象とした支援であることから、安全管理や医療的ケアへの対応を最優先とし、利用定員を5名に設定している点が挙げられます。少人数制を維持することで、一人ひとりの体調変化や医療的ケアにきめ細かく対応できる体制を整えている一方、支援学校の長期休暇期間には利用希望が集中しやすく、受け入れ枠に限りが生じやすい状況となっています。</p> <p>また、医療的ケアや身体状況に配慮した活動を行う必要があるため、活動内容や活動場所についても安全性を重視した選定が求められ、結果として活動の幅やスペース活用に制約が生じる場合があります。</p>	<p>今後の改善に向けては、長期休暇期間における利用希望の増加を見据え、事前の利用意向確認や利用日程の調整をより丁寧に行い、可能な限り多くのご家庭のニーズに対応できる体制づくりが必要であると考えています。また、限られた定員や活動スペースの中でも、お子さまが安心して過ごせるよう、活動内容を時間帯や人数に応じて柔軟に組み立てるなど、活動プログラムの工夫を重ねていくことが必要だと考えています。</p> <p>職員間での情報共有や支援内容の見直しを行い、より満足度の高い支援の提供につなげていきたいと考えています。</p>
3			